

# 病害虫発生予察注意報第2号

## (平成26年7月31日)

### 病害虫名 いもち病(葉いもち・穂いもち)

- 1 発生作物 水稲
- 2 発生地域 大阪府全域

#### 3 発生の状況

大阪府内の水稲いもち病(葉いもち)の平均発病株率について、7月の過去10年間平均が7.9%であったのに対し、今年の予察調査(7月)では以下のとおりで、地域により発生が多くなっている。

中山間地だけでなく、平坦部においても発生が見られ、今後の気象状況によっては、府内全域で穂いもちの発生が懸念される。

調査地点	発病株率%
茨木市 下音羽	29.3%
能勢町 倉垣	50.7%
八尾市 水越	9.3%
岬町 谷川	1.3%

各調査地点3ほ場 1ほ場あたり25株調査

※富田林市、和泉市、貝塚市内においても置き苗等での発生を確認している。

#### 4 いもち病の生態等

- (1)いもち病菌は気温25~28度ぐらいの湿気の多いときに増殖しやすい。
- (2)いもち病菌が侵入するには、葉上等に露などの水滴が必要である。胞子は一般的に夜中に飛散するので、曇雨天でイネの露が乾きにくいときに多くの胞子が侵入する。

(3) イネは体内に可溶性の窒素が多いときに抵抗性が弱まる。日照の多いときはイネ体内の可溶性窒素が少なくなり、抵抗性が強まる。

(4) いもち病菌は種籾や被害わらなどで越冬する。いもち病に感染した籾を種籾に使用すると、来年のいもち病の発生源となる。

## 5 防除対策

(1) ほ場の状況をよく観察し、適期に防除する。

・発生の確認、または発生が懸念される場合はすみやかに防除する。

・穂ばらみ期～出穂期に薬剤を散布する。

・枝稁の部分に発生するいもち病は、遅くまで発生することがあるので注意が必要である。

発生が多い場合は穂ぞろい期～乳熟期にも防除する。

・薬剤により使用時期が違うので、ラベルをよく読んで適期に散布する。

(2) 薬剤耐性菌の出現を防ぐため、同一グループの薬剤を連用しない。

(3) 粒剤やジャンボ剤等の水面に施用する農薬については、散布後1週間は落水やかけ流しをしない。

(4) 薬剤を散布する時は、周囲に飛散しないよう注意する。

〈散布薬剤の例〉【】内は薬剤の系統名

### 【MBI-R】

・ブラシンプロアブル(1,000倍 7日前/2回)

・コラトップジャンボ、コラトップジャンボP

(10～13個〈小包装(パック)〉/10a 葉いもち:初発 20日前～初発時 穂いもち:出穂 30～5日前/2回)

### 【ジチオラン系】

・フジワン粒剤

(3～5kg/10a 葉いもち:初発 10～7日前(収穫 30日前) 穂いもち:出穂 30～10日前(収穫 30日前)/2回)

### 【ホスホロチオレート系】

・キタジンP粒剤

(3～5kg/10a 葉いもち:初発 7日前～初発時 穂いもち:出穂 20～7日前/2回)



▲いもち病の病斑



▲置き苗からの感染拡大の様子

◎防除薬剤については、

●Web 版大阪府病害虫防除指針

(<http://www.jppn.ne.jp/osaka/shishin/shishin.html>)

●農林水産消費安全技術センター 農薬登録情報提供システム

([http://www.acis.famic.go.jp/index\\_kensaku.htm](http://www.acis.famic.go.jp/index_kensaku.htm))

で確認してください。